木村文助研究

通信10号

2004・11・11

通信一〇号を迎えて

赤い鳥に載った綴り方や木村文助の論文など収集に本格的に取り組んだのは一九九七年からである。先ず砂原町史編さん室の荒木恵吾氏に講演していただいた。その前後の新聞に大きく載り、一九二〇年代の大野村に咲いた文化が町民の多くは初めて知ることとなった。

一九九九年に「赤い鳥」復刻版全195巻を古書店からカンパで購入。会の活動が広がり、展示会、新聞への投稿、また情報が入るに従って大野の綴り方や木村について研究や関係の本を発刊している方々、資料保存の森町図書館を知る所となった。このことがこの通信を発行するきっかけだった。

二〇〇〇年六月二〇日発行以来年二回体制で一〇号まで漕ぎ着けたのは会員、関係者のお陰であり、今回の玉稿も含め感謝している。

この間関係の本、秋田から綴り方の本や新聞の切抜き、木村論文、写真等が加わり三百数十点にもなり町郷土資料室に「赤い鳥・木村文助コーナー」の部屋が設けられ、町民や文助の親族関係者も訪れている。京都佛教大学岡屋昭雄氏の講演、全道エリアのラジオ放送、また町教育広報「おおの」へ赤い鳥に載った大野の作文の連載が始まり現在も続いている。

今後も発行を続け情報交換に役立てばと願っている。

（木下寿実夫）

1号・2000・6・20　「赤い鳥」入選一覧
2号・2000・11・14　入選作　高等科一年新栄とよ「橇」、「村の子供」木村序文
3号・2001・4・10　入選作　尋常科六年金川重雄「食パン」、「村の子供」木村論文
4号・2001・10・23　入選作　尋常科二年中谷富彦「せみ」
5号・2002・4・1　入選作尋常科六年・釜沢みつ「山の家」、「村の子供」木村論文
6号・2002・11・1　入選作　高等科二年西谷菊江「銭」、「赤い鳥に載った大野の作文」をこの号から転載
7号・2003・4・1　「赤い鳥に載った大野の作文」
8号・2003・11・1「赤い鳥に載った大野の作文」
9号・2004・4・1　募集作文入選作「新・村の子供」

◆◆◆◆

二〇〇四

四・一　通信9号発行
四・七　北海道新聞「木村文助の業績しのぶ　親族ら大野町訪問」
四・一　苫小牧市木村明氏より丁重なお便り頂く
五・四　しんぶん赤旗「あす放送　お国のためでなく夢を」掲載
五・五　NHKテレビ「その時歴史が動いた　大正・童謡誕生物語」
七・一　教育広報「おおの」No.108「赤い鳥に載った大野の作文」掲載
一〇・一　教育広報「おおの」No.109「赤い鳥に載った大野の作文」掲載

偉大な足跡を知る

教育尽力（つづり方）　木村文助の子孫来町

【大野】大正から昭和初期にかけ、大野尋常高等小学校で児童へのつづり方（作文）教育に尽力した木村文助（1882―1953年）の子孫が28日、大野町を訪れた。木村の足跡を紹介する町郷土資料室などを訪ね、その遺産の大きさをあらためて感じた。

木村は同尋常高等小学校に勤務した際、子供たちの作文教育に力を注ぎ、作品を文芸誌「赤い鳥」に投稿。次々と入選となり、それらを集めた作文集「村の子供」が全国発売されるなどし、注目を集めた。

来町したのは木村の二女・せいさんの夫、明さん（86）と、その長女、兵頭千春さん（48）ら4人（いずれも苫小牧市在住）。ともに以前から、同資料室への訪問を希望していた。

同資料室では主に「赤い鳥・木村文助コーナー」を見学。大野町文化財保護研究会の木下寿実夫会長らから説明を受けながら、「赤い鳥」の掲載誌の実物や、木村が写った数々の写真、関連資料などに目を通した。

孫の千春さんは「地元の人たちが、これほど熱心に祖父の研究をしてくれていることに感謝します」、明さんは「研究書などではなく、実物の資料を手にすることができ、あらためて父の歩みの大きさを感じることができた」と話していた。

（奥山秀俊）

展示物を眺める明さん（左から2人目）や千春さん（同4人目）ら

函館新聞
2004年（平成16年）3月30日（火曜日）

木村文助の綴り方指導の再評価

藍野大学　岡屋昭雄

筆者は、二〇〇二年八月二十日大野町中央公民館において、「木村文助の人となりと綴り方教育のねらい」の講演会に招かれ、大野町文化財保護研究会の会長である木下寿実夫氏に大変お世話になった。

「文保研」が木村文助氏に関する資料を多く蒐集されていることに驚くと同時に、大野町をこよなく愛しておられることである。このことは地域の文化財を大切にする意味・価値を重視することにも繋がっている。

大野町教育委員会の八木橋氏にも多くの資料を頂くことができて感謝している。まさに、文助の『村の綴り方』（厚生閣　一九二九年）に結実する子供の綴り方に圧倒され、感動したことと軌を一にしている。

筆者は、木下氏と一緒に森町の図書館で『漁村職業の全貌』（砂原小学校児童共同作　昭和九年三月版）を見せて頂くことが出来た。この資料が金沢大学図書館に所蔵されていることが分かった。早速に金沢大学の図書館の好意によってコピーして頂く。この資料と文助の著書『悩みの修身』（厚生閣　一九三二年）を繋いで考察すれば文助の教育の目指す方向が見えて来るのである。雑誌「北海道教育」（昭和六年七月号　通巻一五六号）に書いた文助の文章、「村の教育―生産発展の教育論―」の次の文章に刮目する。

「吾々の意味するものは現在及将来、共に、本当に役に立つ教育で、短時間に一躍、大人を作らうなどといふ無理はしない。彼等の現実たる郷土を先づ基礎として学び、之を理解し十分生活させる事によって延いて将来の活動の及ぼさうとするものである。人間生活の重点は興味になって全力がその尖端に集中発揮され、そこから無限に伸びていくものである。従って興味を有ち得ない時停滞があるのみである。そして、さうした興味を有ち、関心を有するものは其直接生活の場であるは郷土である筈である。（中略）

郷土は自然に規制されつゝ人事の交渉から成り立ってゐる。而して其最も重要なる事実彼等の父兄が生活の資料を得べく毎日労役に服して居り、之によって生活が保たれ幸福を享受してゐるという事である。此厳然たる事実を見遁して建てた教育は空疎である。即ち労働は生活上必須にして神聖な事実であり、道徳である。徒食は罪悪であることを一つの信念となるまで十分知らしめなければならぬ。」

前掲の文助の教育の中核には、郷土を知り、郷土を発展させることを期することである。したがって、修身教育も綴り方指導の発展段階に位置づけて子どもの人間教育の大きな柱であり、砂原小学校の『漁村職業の全貌』も、自分の家が漁

村という場所でどう生きていくのか、の全貌とやがて子ども達が其の場所で働くことになる展望をも学ばせていることになる。あるいは、青年団の再教育を考慮したことも、文助の生活の場所である村である人間の教育が必要であることは明確であり、あるいは、家庭に於ける子ども達の生活の生々しい現実を凝視させ、家庭の生活をも変えていく展望をも視野に入れた綴り方の指導であったことは今日に於いても刮目できる実践であることは言をまたないであろう。

今後とも木村文助の綴り方指導の内実を正確に評価する必要性は多く残されていることを述べてこの稿を終える。

暮らしの言葉と文学性

詩人・札幌大学名誉教授　原子　修

一九一八年七月創刊以来一九五冊が刊行された『赤い鳥』は、鈴木三重吉の「芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する」という方針にもとづく、唯美的な文学水準を一貫して維持しようとするものだったから、とりわけ、子どもたちの綴方の指導に当たっても、芸術的価値と教育的効果の結合による〈人間性陶冶〉が主眼であった。

この、著しく文学性に富んだ綴方運動が、大野町の木村文助によって更に地域性に富んだ綴り方教育へと発展、深化したことは、特筆に値しよう。

のち、この流れを受けついだ小砂丘忠義が『綴方生活』を一九三〇年から刊行して全国に波紋を広げ、さらに、東北の秋田の青年教師を中心とした『北方教育』が同年に創刊され、〈北方性教育運動〉が火の手をあげるにつれ、現実の矛盾や不条理を、ありのままの事象から直視し、それを日常の言葉で直接的に表現する〈生活綴り方運動〉が広まっていき、社会変革運動とのかかわりが指摘されるようになった。

わたしも、函館での教師時代に、この〈北方性教育運動〉の理論と実践方策から吸収するものが多かったが、とりわけ、子どもの詩作活動の掘りおこしに没頭するにつれ、〈芸術的価値〉と〈社会変革運動〉との間の微妙なずれにずい分悩んだのだった。

いわば、三重吉路線と小砂丘路線の同質的な部分と異質な部分との問題は、今も、わたし自身の創作活動の重要課題ともなっている。

それにしても、木村文助の指導になる大野小学校の子らの綴方の、日常のくらしの言葉を駆使しての、鋭い比喩や深い観察などの成果をみると、現実のさまざまな矛盾に全身でぶつかっていく生活姿勢から、じつに新鮮な表現が生み出されていて、非常に刺激的なのは、何故なのだろう。

父　木村文助の記憶

苫高専美術科講師　木村　好

父、文助の子ども、兄四人、姉三人は既に死去し、末っ子の私が残された。

父は、昭和十七年、札幌の昭和中学校を最後に退職、森町に居を構えることになるが、自分の部屋に引っ込んで書き物ばかりしていた。

金銭感覚に疎く、財産もなく収入もなく一家は困窮の生活だった。唯一持っていた土地も身内のものに騙し取られた。

母が指圧治療院を開院、何とか生活を支えていた。その治療院もボランテアに近く、収入は魚や野菜位のものだった。

時は太平洋戦争の真最中、けたたましいサイレンの音と共にグラマン機が森町を襲った。私達は大声で父に逃げるよう促し急いで防空壕に避難したが、父は暫くしてから出てきて悠然と空を見上げていただけだった。

昭和二十年、終戦と同時に兄、不二男が東京から引き揚げてきた。一軒の家の中に文筆家二人が同居することになる。

二人の性格は親子でありながら正反対、兄を「豪放の人」とすれば、父は「高潔の人」だった。

うまくいくわけはなくその家を兄に譲り私達は近くの四軒長屋に引っ越すことになる。二軒借りて、一軒は父の書斎とし一軒を治療院とした。母のせめてもの思いやりだったが、それが借金となり母の背に重くのしかかった。

父は朝五時ごろには起床、冷水まさつ、書き物、午後は青葉ヶ丘公園へ散歩に出掛けるのが日課だった。

それは雨、風に関係なく規則正しく聖人の如しだった。

一度、私と公園でばったり出合ったことがあったが、気恥ずかしそうににっこりしただけだった。自己表現は下手だった。父と対話したこともなく、別世界の人だった。

昭和二十五年脳梗塞で倒れ、言葉や手足が不自由になった。昭和二十八年、床に臥して間もなく逝った。

享年七十一才だった。

ＳＴＶラジオ「ほっかいどう百年物語」で父、木村文助の綴方教育の業績を聞き、また、図書を読み偉大だった父を回想するこの頃である。

偶感

南北海道史研究会員　近江　幸雄

大野町縁の小山内龍を「北の絵本作家」として一般、特に函館市、大野町の人々に認識し評価されるよう資料収集と研究を重ね、ある程度の成果を得られるようになったのも小山

内夫人と「文保研」のご協力によるものであった。

大野町の夫人宅には数度自転車に乗って伺った。強風の中帰途に着いたが、暖かい心根に和らぎの気持ちを抱いてペダルを踏んだ事を思い出す。

数度の中で夫人に同行していただき赤井千代さん宅を訪れ龍作品と谷内六郎の手紙を拝見した。

ここで木村文助先生の名前を聞かされ「赤い鳥」も話題となった。この時まで、私は木村先生の足跡を全く知らなかったのである。「赤い鳥」を数冊所蔵していたので若干の知識はあった。

「文保研」の木下会長の熱心な働きかけから木村先生の綴り方運動が町の広報誌や新聞報道、ラジオ放送、研究者の来訪等により未知な私たちにもその活動の大筋が知られるようになった。私が北海道新聞に連載した「ふるさと人物散歩」にも登場させていただいた。

なんと言っても木村先生の綴り方運動が実を挙げたのは鈴木三重吉主宰する「赤い鳥」が募集した綴り方が入選し、大野小学校の名が全国に知れ渡ったことである。以後続々と同校から入選作品が出たのである。

辺鄙な地方の小学校が脚光を浴びたのだから生徒、父兄の喜びは大きく、木村先生の嬉しさも格別であったろう。

大正時代に発行した「村の子供」の遺志を引き継いだ形の「新・村の子供 〃マルメロの木〃」発行は次の世代の為に続刊されることを祈る。

合併したとしても地域毎の文化は異なるので今後の「文保研」の役割は非常に大きい。

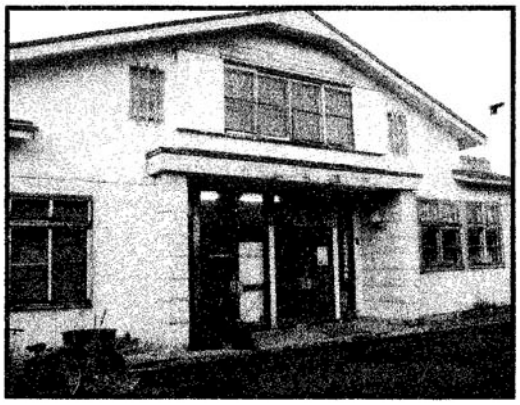
折しも北海道新聞紙上に福井県の大野市が紹介されたが、今後の交流に影響が出ないものかと気になるところであった。

私説であるが、大野町文化の三本柱、「二股古戦場」、「木村文助綴り方運動（赤い鳥）」、「小山内龍の史料」を今後も大切に保存し継承していただきたいと願うものである。

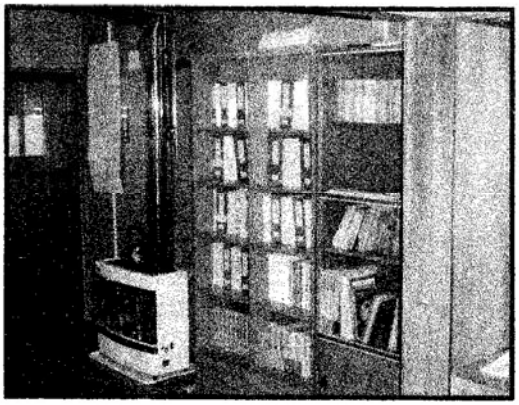
【大野小学校が最初に入選した表紙】

大正11年8月号

赤い鳥社発行の「赤い鳥」
創刊は、大正8年(1919)
表紙の絵は清水良雄



赤い鳥・木村文助コーナーのある
大野町郷土資料室



展示室・赤い鳥復刻版

木村文助大野小学校長と「村の子供」

木村文助は、明治15年秋田県雄勝郡村に生まれた。秋田師範を卒業して農村の小学校の訓導・校長を歴任、大正6年、志を抱いて渡道し、大正7年（1918）から昭和3年（1928）まで大野尋常高等小学校の訓導兼校長として、綴り方指導と学校経営に活躍され多大な業績をのこした。

童謡作家の鈴木三重吉主宰の赤い鳥運動に共鳴し、作文（つづり方）に限らず図画にも、児童文芸雑誌「赤い鳥」へ応募し、他校の群を抜いて毎号のように入選して誌上を飾り続けた。

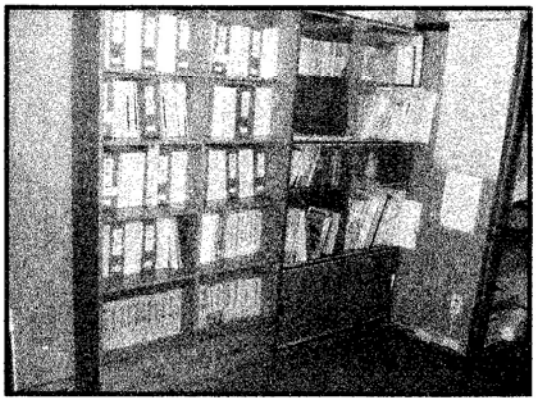
また、入選の作文や自らの論文も含めてまとめ、「綴方生活　村の子供」を発刊した。全国の教師や子どもたちに広く読まれ、「北海道の赤い鳥学校」とまでいわれ郷土を誇れる高いものにしたのである。

その後、砂原小学校、戸井日新小学校を経て退職し、昭和28年（1953）森町で、教育にささげたその生涯を終えた。綴り方教育実践の業績は「北海道教育史」に詳しく掲載されている。木村の研究者も全国により出版物も出されている。

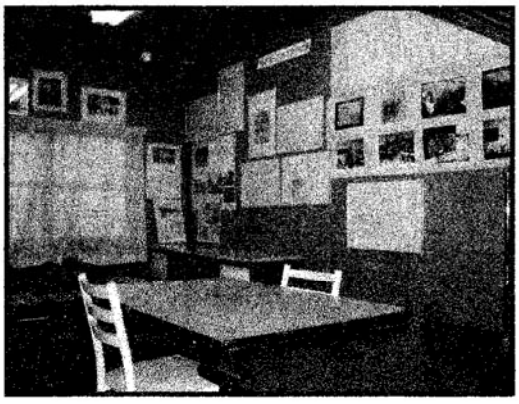
平成12年8月

㊞大野町教育委員会

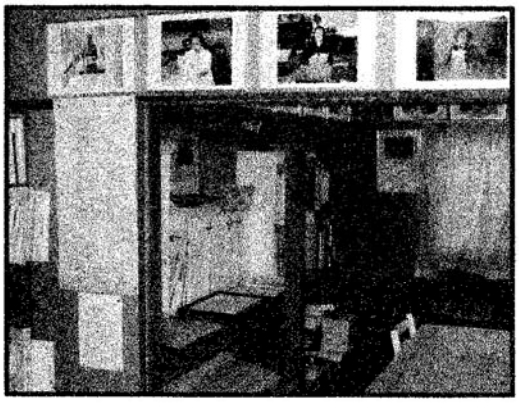
大野小学校近くに建つ
木村文助説明板



展示室・赤い鳥や
木村の論文など



展示室・木村の年譜など



展示室・赤い鳥の
入選者らの写真

連載

赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

今回は、大正十三年（一九二四）七月号に掲載された西谷菊江さんの作文「銭」を紹介します。

銭（賞）

大野小高二　西谷菊江

ある日、私が学校を六時間で帰って火にあたっていると、叔父さんに「お客さんが来るから酒を買ってこい」といわれました。私はもう薄暗くなったから行きたくないが、行きたくないといえば、酒きげんでいるから叱られると思って、戸棚から一升瓶を持ってくると、電気がぱっとついた。

一円五十銭持ったままで町に出かけて行って、ようやく酒屋に着いた。そして一円ののを一升買ってきたが、七町のところだから長い。後ろを見ても前を見ても誰も来ない。左も右も田圃で、遠くの方にただ電気の光ばかり見える。暗くなり、しだいにさびしくなる。もう二、三町行くと家だと思って、一生懸命歩くと、途中でかちんと瓶にあたって落ちた物がある。はっと思って手を見ると銭がない。びっくりして、そこらを見たが、たった十銭しか落ちていなかった。落としていくと叱られるから、また一生懸命でただしていた（確かめていた）が、暗くて見えないから、右手で瓶を引きずり左手に手袋をはいて、黒い物があったり丸い物があったりすると、銭ではないかと思って、かきまわしたりしていると、また十銭あった。

少し面白くなって一間ばかり行くと、こんどは二十銭落ちてあった。もう十銭位だから帰ろうかと思ったが、叔父さんがおっかないので、さがしていると町の方から人が来た。見ると向いの林のお父さんであった。私が下を見てたずねて（探して）いたのを見て「何おとしたの」と聞かれたので、「ぜんこ」というと「見えるもんか行くべい」といったが、私が行かないでまたたずね出すと、また人が来たので、聞かれるのがいやで、拾うのをやめて立っていた。それは私の家に行くお客さんだったが、私を知らないで（わからないで）行ってしまった。

少したずねたが、家で待っていると困ると思って帰りかけると、家の方から人が来た。きがついて見るとそれは母でした。いきなり「きくえ、汝（おまえ）またぜんこ落としたべ。なんのじゃまして持って来たば（どんなふうにして持って来たんだ）、この間抜け。これあ何ぼ落としてもこりないで、何ぼ落としたてな」といわれたので、「十銭」というと少し軟らかな声で、「十銭ばし（ばかり）落としたって、こたらねかがるてな（こんなに時間がかかるのか）。汝さ銭持だせれば落とすし魂抜けでいだべね。今に死ぬべね」といわれたので、悲しくなってあつい涙がほろほろと落ちた。

帰ってから叔父さんに叱られるかと思ったら、「今度から気付けて歩け」と思うよりやさしくいわれたので安心した。次の朝早く拾おうと思って、起きて外を見ると、雪がよほど積もってあったので拾われなかった。

（大正十三年七月号）

■ことばの意味

【七町】一町は六十間で、約百九メートル。七町は約七百六十メートル。

【一間】約一・八メートル。

【ぜんこ】銭。お金のこと。

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。わかりにくい表現や方言などは、かっこ書きで補足しました。

●綴方選評

鈴木三重吉

西谷さんの「銭」は、どこまでも淳素（素朴）な態度で飾り気なく、よく写しています。落とした銭を拾うところ以下、お母さまに叱られるところまでの、西谷さんの心理、動作、人々との接触など、すべてがありありと躍動しています。銭を落としてがっかりしていると、そのうちに二十銭までも拾い上げたので「少し面白くなって」また探し続ける、その気持ちの推移だの、また人に聞かれるから、わざとさもないふりをして立っているところなどは、子供らしい感情がよくでていて微笑まされます。お母さまの言われた言葉の中で「なんのじゃまして持って来たば」というのや「こたらねかがるてな」というのはどういう意味でしょう。

「赤い鳥」２度目の10人入選を記念して撮影した写真

連載

赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

おひる（賞）

大野小尋二　田山みつ

きのうのひるに、ごはんをたべに行くと、がが（母さん）がひもで、じょうをかって、いませんので、私はきもがやげで、ひもをむりむりほどいてはいって行くと、うちのちゃっぺ（猫）がねぶりかげを（うとうとと）していました。わざとしょうじをがらがらとあけると、ちゃっぺがびっくりして目をさましました。そして、ながしまい（流し台）の方へ行きました。

てぶる（テーブル）をだして、その上にひもをおいて、ごはんをたべました。たべてしまってから見ると、ひもがないので私がはんぶん泣きながら、にわの方やながしまいの方をただして（探して）もないので、またてぶるのとこへ来て見ると、ちゃんとあがっていました。それから、それをもって、となりのかっちゃ（母さん）に「おら家のがが行ったどご知らねえが」と聞くと、かっちゃが「はちけんや（字稲里の一部の旧名）さ行った」と教えました。

私はあんしんして、そのひもでまたじょうをかって、すずえちゃんのうちに行って「すずえちゃん」とよぶと、へんじをしないので、私がさきに行く気になって、ちゃっちゃと（さっさと）来ると、「みっちゃ」とよんだので「はい」と言ってすずえちゃんのところへ行くと、すずえちゃんが「わし家のかっちゃん、いなくてさ」といいましたので「私だって、はんぶん泣きながら、まんま（ご飯）をくったんだよ」というと、すずえちゃんが「私だって」と言いました。

そうしていると、ほんごうの方から、おら家のかがにたような人が来たので、私がすずえちゃんに「あれがわし家のががでねが」というと、すずえちゃんがだまっていたから、私が走って行ってみると私の家のががだので「ががどごさ行って来た」というと、「ていしゃば（駅）さ行って来た」といったので「何しに」というと「きたみのおどちゃば、おくって行って来た」と言ったので、「うん」と言って、ががよりさきになって家へ行って、ひもをといで、戸をあけて、すずえちゃんと学校へ来ました。（大正十三年八月号）

●綴方選評

鈴木三重吉

二年生の田山さんの「おひる」をまず賞にとりました。冒頭に「おひるにごはんをたべに行く」とあるのは「学校からお昼ご飯を食べに帰って来た」のです。そのすぐあとの「がががひもで、じょうをかって、いませんので」は「母さんが紐で戸締まりをして、どこかへ出て行ってうちにいないので」という意味です。低年級の人の作としては、本当に上手にのびのびと書けています。純真な、可愛らしい良い作品です。いかにも単純な扁平な描写でもって、その場その場の気分そのものが、ありありと浮かび出ているのが貴いところです。戸口をしばってあった紐を見失って、泣きそうになって探し回るあたりや、となりの「かっちゃ」に行き先を聞いて安心して出て行くところだの、ことにすずえちゃんと二人で、お互いに母さんが留守なことを話し合うところや、お母さんと出会ってからの対話や、喜んで先走って行って、戸を開けといて学校へ行くあたりなどは、すべて情景がまざまざと躍動していて、本当にあどけなく、哀れに可愛いものです。田山さんの学校からよこされる作は、みんなこういう自然な、純素な作ばかりです。同校の先生たちの正しい指導が想像されて、ありがたいです。

風景（推奨）

大野小高二　工藤金一

（昭和二年一月号）

●自由画選評

山本鼎

北海道の大野小は、純良な教師がいると見えて、子供の絵がいつも素直で、展覧会絵や雑多な印刷美術の悪感化から無雑作にのがれている。なるほどその絵は痩せている、骨ばっている、気が利かない、その代わり、虚飾がない、子供の直接な認識があり、可憐な土臭い詩がある。

工藤金一君の「風景」（推奨首席）は、寂しい田園の風景トーンをよく感じた絵だ。空がこれだけしっとりと曇っていなかったら、空に接した草野がかようにぼっとしていなかったら、草の畔がこれだけかっきりと描いてなかったら、中景の草むらがこれだけ暗く重くなかったら、この絵はチャームのないものである。子供は筆の粗密に不注意だが、この絵は適度の粗密によって、よく景の立体的印象をあらわしている。いけないのは色だが、この絵においてはそれはクレイヨンの罪に帰してよい。もしクレパスを使ったら、但しは水絵の具を使ったら、もっと楽に、よい色が出たであろう。

資料閲覧（赤い鳥・木村文助コーナー）

「大野町郷土資料室」

町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側、木造の建物です。

〇四一―一二〇一

北海道亀田郡大野町本町二〇〇

ＴＥＬ（〇一三八）七七・六六八一

開館；九・〇〇～一二・〇〇

一三・〇〇～一六・〇〇

（町教委郷土資料室係が対応します）

・休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください

・函館方面→車で、国道二二七号に入り大野町市街地まで、20～30分。

・道北方面→車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、五分ほどして大野方向に右折し、更に五分で着きます。

編集・作成；会報委員会
木下寿実夫、米澤康一郎、
小林亜輝夫、国塚妙子、古俣芳衛

発行；大野町文化財保護研究会
（略称文保研・ぶんぽけん）

〇四一―一二〇一
北海道亀田郡大野町本町六八
会長　木下　寿実夫
（〇一三八）七七・八五三五